和氣清麿
一代記

本朝錦繡談圖會

二

へ13
3941
2

門 へ13
號 3941
卷 2

本朝錦繡談畫會巻二

東籬亭主人補編

洛

奸僧辱命昇禁闕

天平宝字四年三月。新帝大炊御政ぐめふ。大臣以下の諸卿を召きく詔ありける。今天下諸物を交易すること。専ら銭を以て為す。是弁理なることなきふ猶ることのなきと聞く。まこと所謂世宝とらめべし。よく先朝より。鋳銭司を置まく。製造なしめるに。さるふ近年密ふ偽銭を鋳く。利益を貪る族あるよし。今ものを糺さんとせば。忽刑謬を受くることの多かんなり。ものをりけく真偽其まふ通用ぞ。今更ふ。民間尤も弁利の銭を造つく通用なるめふべ。自く旧銭い痛すべくと。賢き叡旨を告

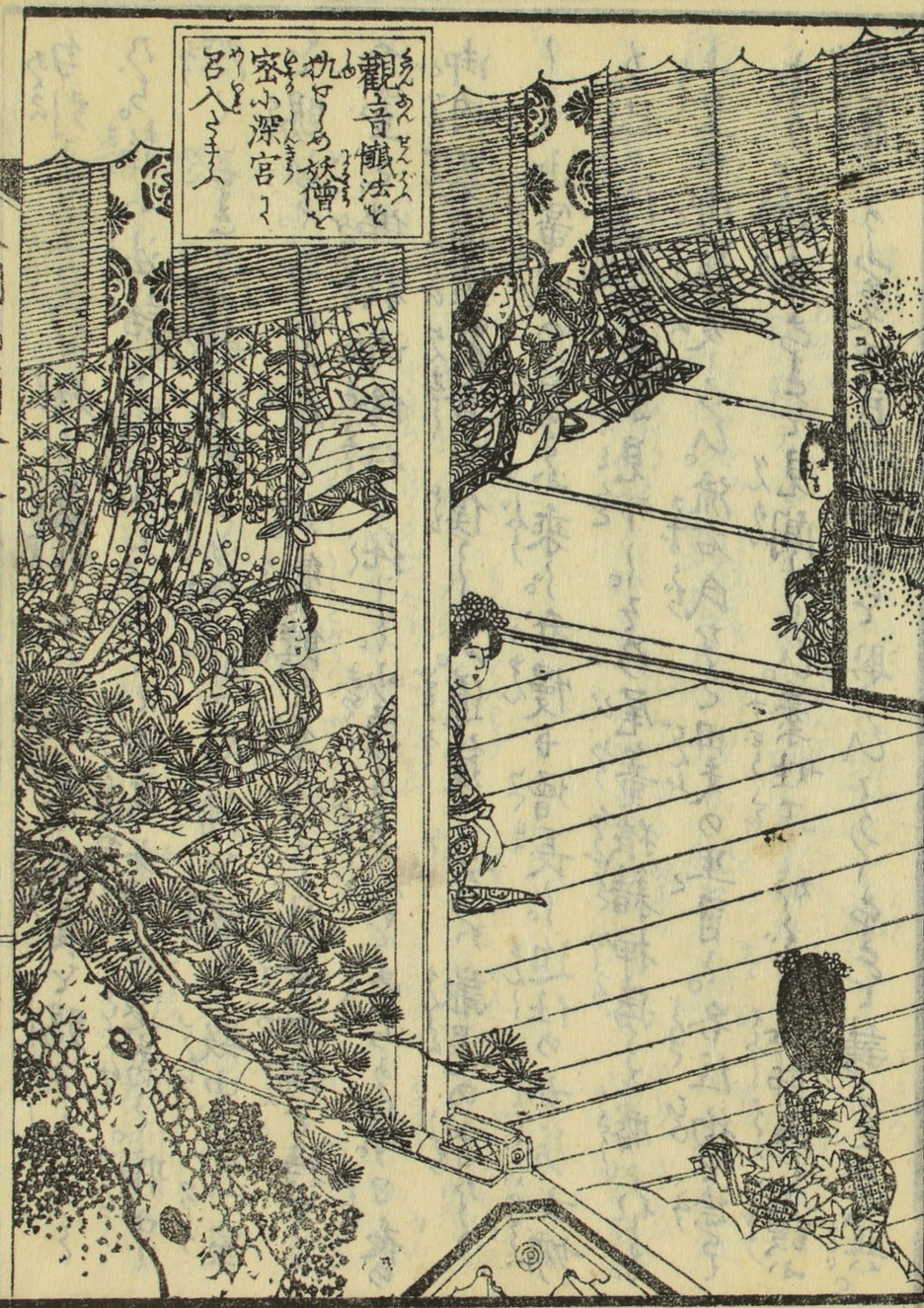
大正十年八月廿九日寄贈
本大學出版部長

給へど。諸卿諾々として孚大の仁恵を感佩し。則諸卿僉議の上。新銭三品を鑄る事を。萬年通宝として。一銭を以て旧銭の十銭とし。銀銭を鑄て太平元寶として。一銭を以て旧銭の百銭とし。猶又金銭を製して。開基勝寶として。一銭を以て旧銭の一千銭として普く通用せしめ。緊くもとが偽濫を懲すことを禁じ。既に三品の新銭世上に流布するに。弁理自由なるを感佩し。万民大に賑ひをなす。千時高野天皇いとなる叡慮やらん。遽卒都を。同国保良の郷に遷さんを命じ給ふ。大臣以下大に驚怖し。国費多くして事を歎奏ものすれども許さず。諸国に厳令して。良工及人夫を登用し。日夜を分ちず造営ひしめ給ふ。漸く翌年十二月に。諸殿ならびに禁垣おのおの

まで其功成就なせるぬ。翌六年三月。両天皇新都に遷幸まします。然れども百官の館亭いまだ皆造なるまで。各工匠を急せ給へども。費しく官禄に焦じ。米穀を下行し給へども。失費の半にも及ざれば。諸臣困苦に至れども多く。将又都下の高直なる新都に引移る。混雑失費大方なるぬ。負賎の貫家に扱るく。舊都にあるに業とする人は上下交上皇の市計を。密に歎息すること多し。上皇いかに下民のことを。更に叡慮に掛ることなし。表に王位を禅ひ。玉虚に掛る豊成吉備に。物に託して筑紫に遠竄。今は憚なく昼夜押勝のみと傍に侍り。剣を押勝の男七人。嫡子正四位上真光。従四位下訓儒麻呂同位朝猶三人に。俱に参議に

任じ。従五位上小湯麿。従五位下薩雄。同後五位下辛加知。同
執掉等。衛府開国司に任じたもひ。其権勢肩を比べる
者もなく。富貴栄花昔小譬へ方もあらず。古今未曾有のまと
なり。さるに今年六月已ふ光明皇后の御願年ふあらせ
ましまして。諸寺諸山に詔して。佛事作善を執行ひ。宮中ふ
も種々御修法あらせられる中ふ。観音懺法を修ひられる。
御導師い奥福寺慈訓長老。其余数員の僧衆と連れ。異
口同音ふ誦経のさま。京より鳳凰金殿。善美を尽ひ荘厳
ろ結構。まことにあらふ。圓通大士もさふ影向しましまんと。着坐
の公卿奉仕の女房も。坐ふ感涙を催し。袖潤さあふなりける。
高野皇も廉中より。密ふを荘厳を叡覧ありふ。衆僧の

末席ふ連なる一貫の僧。いとなる叡志のまゝなり。近侍の女
嬬をして法号を問ひまつる。東大寺義淵ろ徒弟ふ。道鏡法師
申すを奏す。汝ふ法座満じ。導師ふ彼物ろ。各退出ふ
しなる。翌朝高野皇女房ふ勅。密ふ道鏡法師召る。抑この
道鏡とは。河内国一本丹波とする非の産ふ。弓削氏ろ出る。義淵
長老の弟子となりしかども。徳行に更あらず。面に忍辱を作れども。
心中ふ奸智逞しく。良もすれば不法の事ども多く。同侶ろを
悪み嫌ひ。大法師なれども。豈計も。女房ろ召ましまみる。須彼
哉渠。昨日の法延ふ礼あらず。厳重の公命ふも及ばんか。最心
地なく密ふ笑ひ。道鏡も流石恐縮心なりける。京ろ大膳
不敵ふ至這哉なれども支あらんと。自若ふ参院ひる。則女房


観音懺法を
執行する妖僧を
密室深宮に
召入さるゝ人

勾引して上皇を拜し。簾外に善美の肴食を賜ふ。
ひら。静ふ法話を叡聞あるべし。女房女嬬を遠斎く。帳中
深く召さる。斯く即日少僧都の僧綱を賜ふ。殿中ふ一室
を賜ひ。ふ居しめ。饗饌を奪ふ。侍女女嬬を侍ら
め置き。佛教御修行ふ怠しく。少頃も玉座を離らるべ。日夜の
御内宴。酒盃飲食を供ふ。道鏡ひ始めふ謙退の容なり
しも。御寵遇の百ふ乗じ。我慢も増長し。迫仕の女房女嬬
も。已が侍者のごふ見下し。その尾童狼籍押捕も勝らしむ。
上皇の御寵愛ふひ。流石氏なき田夫の生育し。各位狗を捨て
ます。新帝ふを見聞し。素姓正しかるべ法師皇を謗ふ
内寵しの甚。万民の耳を恥ひ。ひ目を謙ひ共。

上皇更ふ容るべ上。是ひ中々に。新帝を疎ひ御心ふ
ひ。何となく御隙穏なるべ。新帝新都ひ又復の奈良の
都ふ還幸ます。大臣以下顕官の公卿も。扨なく隨く旧舘ふ皈
ひ。是ひ両朝のごとくなり。人心更ふ穏ひず。密に疑惑
をなすべし

一書ふ。弓削道鏡ハ。天智天皇第六皇子。施基皇子追号白壁天皇
の皇子ひ。則光仁天皇御末葉ひ。太しく誤なり。本
文ふ云べく。河内国志紀郡弓削村ひ出ぶ。弓削の道
鏡ひ云ん。既ふ八幡大神の託宣ひ以て。天孫に非ずして
明らかに。今も河内志紀郡ふ川を帯て東西ふ弓削村あり
往古の弓削なんか

捕猛大暗逐素懐

説話分両端。千爰正二位大納言和氣清麻呂卿といへり。垂仁天皇皇子。鐸石別命十四代孫。美作備前国造平麻呂が子なり。鐸石別命の子。弟彦王。神功皇后三韓を征伐の御軍に従ひ。新羅国へ戦功數わるゝ上に。皇后御歿朝羽五年。應仁天皇の兄王。忍熊別皇子逆謀をくわだてゝ。皇后の勅を奉。官軍の大将として西国へ発向し。針間と吉備の境山に於て合戦を遂。終に忍熊皇子御生害まします。官軍十分の勝利を奏ぜり。新羅国より度々の戦功。旦い吉備美作鎮護のくわだてあり。備前磐梨縣を賜ふ。以来此地に居住す。抑清麻呂卿は。聖武天皇天平五年某月の誕生なり。其生質。正直誠忠旦才智を敵。幼稚の遊戯も邪なるを嫌ひ。正道を事とせしが。一時父平麻呂。家僕を呼て云。の用わるべし。今明日の中。汝が隨意に到れと命ずるに。僕畏て。明日も極て快晴なれば明朝出て奉べきと申す。清九つまで十歳なりしが。父の勝下に居て聞て。かの家僕を賛ふまゝ。今父が命じ給へ則君臣を憐こゝろ仁慈。ほどる者君命を得て。労をいとはず勤て忠なれ。明日も快晴と極て。何と云くるを知る。天に不時の風雨あり。即今晴るとも後刻陰て。夜の雨も朝に晴る。司天暦算の輩も。明日晴雨の測がたし。況や汝に於ては。若明朝降雨べ。

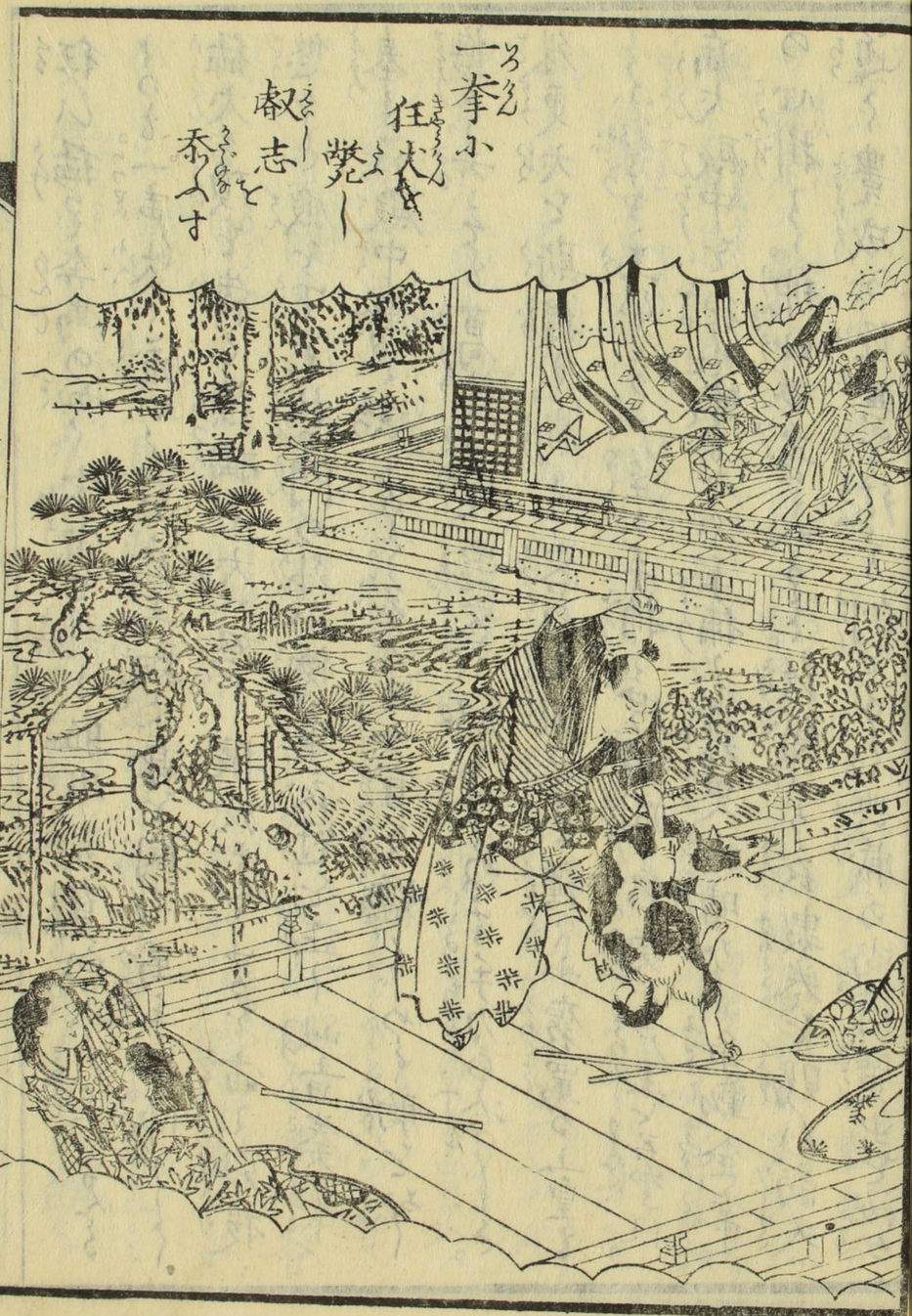
ものを君に蔑する空言とうつぶし。汝不聞哉。或人。子ら伶俐と生
父く賞讃ふ。父謝〳〵。曾〳〵才智ある者なるぞ。志ものぶる。明日の
晴雨を極る什の。空気みるど答〳〵。惣而君父ふ事うゑん。典勢
軽幹を撰ぶぞ。忠信志ぶ〳〵も尚ゑうぶを。大人も及ざる巨細の
教示〳〵。家僕ふ全身ふ汗を流し。頭をさき〳〵罪を謝〳〵直〳〵
幹事を果〳〵とせん。又清麻呂卿ふ姉君あり。廣虫の君と号。
後正四位下典蔵尚侍ふ任叙〳〵ひしぐ。生質清麻呂卿に等
〳〵。容貌美麗〳〵心志もまた潔白貞列なるまし。殊〳〵姉
弟の御中和睦く。常ふ稚戯ろ矢話る。聖賢の語を論談し。
和漢ろ奸曲を諱悪。凡君ふ仕るものい貴賤男女を撰
ぶぞ。誠忠ろ志なんびあぶ〳〵ぞ。人の賢愚い矢ろ稟るなれば

賢あるとて忠心ぬんび良もまた好ま犯さ愚なるといへども
誠忠を懐ぶ。却〳〵事物を貫通し。身を過つろ患ふし諾と。
忠信い身を保つの守なり。此言ふ終身忘ふ忘ずなる。互〳〵
語合ろひ〳〵。只ふ志学の頃ろ。両君とも朝ふ仕奉なり。清麻
呂ら先衛府ゑ加へ〳〵。右兵衛少尉ゑ任ぜ。程ふく近衛
将監ゑ。民部卿兼摂津大夫まぐ登庸せる。廣虫も女官
ふ加へ。上皇の左右ふ侍ろ〳〵。正直純負なるぶ。ふ仁恵と深
く被ゆ。同じく追ふ昇進し。典蔵の尚侍正四位ゑ叙しぬ。
されば姉弟とも。かく忠貞の心ゑ。帝の穏なる御形容を。心
中ふ畏めつ斯ふ折ゑ猶更ふ。我身を粉骨砕身し〳〵。臣
臣ろ道を尽さ。互ふ心を励まし。仮令の私もなく。日夜勤

労なくして流石に我慢の押撈もかの姉芳が精忠を感じ。人
うらをかうく貴美せしぐ。帝も一層愛しまふ。千爰まで近衛の
官人。従五位上葛木宿祢戸主とつる壮士あり。其性老実にて。
文武の道も疎うず。一骨の壮雄なりしが。如何なる郎ふる廣虫
を垣間見いそかる艶女をば得ざんとて。不圖意くの情を発
し。人りく其名を聞うきもふ。兼く交厚き清麻呂が姉の廣虫
なるを空て。雲ふ桟道得し意ふて。速く和気が其ふいう。白地ふ這
件を告げ。新婚を計ぐんをを求む。清麻呂こうく。足下と同僚
とらひ。ふ道を学の朋友なるべ。縁を結ぐい願ふ所去なし。
我妹なる廣虫ハを性潔白にて貞を守て。専ら君忠を励こて。
更ふ婚を望の心なり。原より男女の道ハ。天縁にて人力ふらぐ。

志うるを強く成さんと為む。却ふ夜を決く成難うん。不如良
辰を俟うんふ。然なり序を以て。足下の厚意ハ。廣虫ふ僭ふ
聞置うん。吳々天縁を忍びふと。道とそたる返答ふ。戸主も
大ふ屈伏しふ。ふ已後ハ殊更ふ。清麻呂と懇意を尽ひと。去の
一件ハ再び口外せず。実にや恋情ハ意の外。如斯篤実の戸主ふ
まで。清麻呂が廉直の異見ふ恥く。放心とすまと忘散ぐく。憂く
朝夕ふ募ば。顧身も女しまと。神ふ祈ひ佛ふ願ひ。月水守護
を祷うく。空く二光を過せ。更ふ應験もあらぐ。今ハ清麻
呂が教示も忘れ。一絨の書ふ切なるを述く。廣虫が侍女に便倚。
親ふ言くふを送うく。或夜廣虫が局に声ふく。妾が上皇
ふ奉仕も。汝が妾ふ仕ふを。雲泥の違いあまと。同じ君臣の

る。斯る正なさ支離る。不忠とやいへん。無道とやせん。夙夕局を下るぐ〳〵と。日頃温柔の廣虫が。何日なさ怒声ふ。局々の女房達。僭ふ動静を窺ふ。侍女を厳〳〵戒るる。侍女へ〳〵怖ぢ恐れ。全我が鈍きを忍ぶ。かく大切の変なるを。夢も志ぐ計へ。陳謝ふ緯る。後来をもて慎べくれと。潸然泣〳〵理まで。廣虫漸面を和ぎ。過てハ改ふ憚ぐ。賢き人の教もあまで必向後慎る。さて其消息を復さんふハ。貴虚ハ厚ぐまど。仕への道もて殊更の制禁。再勿宣そと申せよと。襟掻裝ひ裳裾を正し。徐〳〵奥ふ出られハ。同仕集囲〳〵寄囲と問へ。戸主が故を字。弥々廣虫が貞操を驚嘆る。其後一時ろ珍変てもあれ。何地よりか入るるむ。一足の病犬。金殿の廊下ふ昇らも。尾を垂〳〵奥へ長閑々々歩こ入を。女嬬ふまを見るよう。思ひよる孤ハ大き驚ること。面こ竹杖あるハ帚ふ〳〵上〳〵声々ふ出を退まと追ふ〳〵病犬却〳〵怒を做し。此所を飛越彼處く登を東西縦横狂ひ巡らを適ふ向いハ。牙を見〳〵飛掛るんず形容ふ。あまるく〳〵と吠ぶぐる。誰う止得る者なきハ。大ハ益猛ふ驕る。故ふ寝殿ふ入るんとす。上皇守護の女房も身を過ぐと立走る。廣虫ハ玉座を禹まず守護ふ居るる。此時ふ急く走く廊の口ふ立塞を駈来犬ふ声とり玉座近く速太的と。我身を餌ふと突立まハ。自然の王威を廣虫が魚膳歎心も感動せ〳〵。忽身を反し。外の方へ駈出る。かく一時の騒動なまハ。宿衛の武官ふ急を告る折柄葛木戸主勤番ふ奉るとらるまふ。閥服の袖手拶つ。御拜渡廊ふ〳〵かる。疾犬ハ


一拳ハ
狂犬を
斃し
叡志を
示す

狂い猛き奔馬の如く。宇宙を飛ぐ駈出し。真向に戸主を見る
るも。一声吹く飛かるを。戸主飄と身を閃し。馬手を伸し
猛犬の頂を特と掻掴む。大い怒く振放さんとするを。宙に引提
悠々と殿を下る。禁門の外に擲棄。衣冠を正し。山吉奏し
奉まつる。殿中漸く静まる。多くの女官女嬬ども。胸をか
撫でて去る。蒐木戸主。艶容に似ず。手力の冷じさ。
殊更大を斯提く。斯き容の立派さ。種々に褒罵る上皇も
ふ驚き玉ひしが。戸主が手捕へ由聞し給へ。更に戸主を召出し。
病犬殿中を犯す事なく手捕へ。殊更天晴なる争動全常
の心掛へ。神妙の至りなること。紋織る衣数奉を賜ひ尚又
迫く豊成が。怪異を語る例を問へ。典蔵の尚侍廣虫を汝が

妻に賜へなるも。近侍を召へ告げさせの人。戸主に叡慮を奉り。手
の舞足の踏処を忘れず。龍の胆の珠得て意地。簾中を通々三
拝し。勇進く退出す。上皇まさに廣虫を召まし。人多き人の中に汝
一人朕を守護して側を離まず。既に危きに及ぶ。身を
棄てて防ぐ。若汝が助なくんば。朕災を免がれと。百方労
ひ給ひ。是が勧賞として金帛数多を賜ひ。また更に宮人に
菖木宿祢戸主。汝を恋ひ変切なるに。然まで人を
ぶるに不図。人を知り勇を奮ふ。汝を配へ相合妹と沓。
眺めて月氷々。風く設とも。なべて。更に白銀許多を
びまた。廣虫に仁恵身に余まる。愚て憎ぶの人戸主と
さ。無可負も夫定の人ぶる感佩又恥ぶる先ぶ。面に

桃花乃色をなす。只鰭伏て勅答なし奉る。軈て父の平麻呂
清麻呂等と量り吉辰を卜へ戸主の家に嫁
ぬるに戸主の恋くなる縁なるべし。御仁恵を以て結ひ妹
沓脱まで。交ふ亀筮ふ比て千年を契る。巷竹ふ託て八千代
を寿く。原ち廣虫仮初も夫の蛍ふ倦ることなく。専ら貞操を
守りて節を乱さず。家の侍女奴僕を恵て。慈悲を尊ぶ
家支を脩む。故ふ家ますます栄え。年出て三年の春秋を
送迎ふ。実や會者定離り。戸主感風の意とて。仮初に
即ち日ふ病苦を発して。終ふ黄客の負へる。廣虫の
悲歎大方なるべし。三年家を守め。緑の黒髪自ら切て法均に与へ。
夫の善提を吊ひ。上皇ことを聞召して。殊ふ不便を加へひ。

宮中ふ召帰さる。山時上皇御落飾の後なれば。則御法弟と
なりたまひ。進守大夫尼位を授け。四品の封戸位田を賜ひ。帯
ふ上皇の左右ふ侍り。出納の職を司りて。法均ハ重
なる仁恵を感佩し。愈忠勤を励む。側ふ慈悲を専とす。明年
六月大旱ひて降雨なく。畿内穀艸稠枯。就中大和国中ハ諺ふ
月影ふ旱ることを田圃。ひんや右斯炎天ふ於ては。看々黄
土ひて青葉の色なし。於是国中の飢饉大方なりず。父母凍
餓し。兄弟妻子も離散す。中ふも憐なる男女孩子。阡陌に
棄らる者夜夕ふ泣し。法均倩ふ思ふ壮者恒産ふ怠慢ふ
不時の手的なるべ。かく山歳に困苦を受る。所謂自業自得
ひん。可憐ハ繈保の孩子。懐を離れ乳味を渇す。

見て忍びず。人を遣して拾はふ。已に八十三児あり。悉その衣服餌費を惜しむ。窮困に育しめ且度々米粟を贈る。是ぐ為に匹夫匹婦飢渇を免れ。いらく大切に養育せり。後年光仁天皇の御時。法均ぐ慈恵を祈誓しうひ。法均ぐ養子として葛木首の姓を賜ひ。悉皆朝に仕奉せしめ給ひ

奸臣失竜企叛逆

話再復元。高野上皇の道鏡を宮中に召されし後。日夜御寵愛甚し。殊に新帝の舊都に還らせ給へり。世上風説喧しく。種種の謳歌巷街に唱しぐ。流石に上皇も懶や覚えん。南良の法華寺（典福寺）に入御まし。御飾を落しぬ。御法諱を法基上皇と称奉る。然も更に御発心まはず。たゞ人口を塞ぐ為にして。御内宴に増長し。旦天下の政は新帝の隨なるのみ。委く上皇の叡慮に宰ひらる。于爰太政大臣恵美押勝。年久に上皇の御寵遇を蒙る。位官人臣の上に居て。殊に外風の推を揮ひ。走獸も四脚を曲伏め。飛鳥も両翼を縮折る威勢なり。一朝道鏡参入せしより押勝が君寵即日に廃し。再び内宴も召まず。剰へ内儀の出入も厳しく制止さ

れ。見ぐ為に權勢も減じ。日夜に門外の車馬少く。朝々高堂の謁客も疎く。不義の富貴は浮雲のごとく。自ら寂莫形容に。押勝心裡大に憤り。出處不定の乞食坊主に寵を奪はれ而已なるのみ。斯く位威まで下劣ては終に出の身をも害すべし。不如偽法師を誅戮し。上皇をも遠嶋へと。密に叛

逆を企く。是ふよく〳〵上皇く偽奏せく〳〵今上明〳〵うふて下奉
く。天下治平の御代を俗し〳〵諸国の武臣等自く〳〵風流花者
ふ心流まし。弓馬の道ふ怠慢の気色ふて〳〵臣君軍ふよりう
苟も。武門統領ふ有なく〳〵。金所ふんふんい最恐し〳〵希くて
太政官の御正印を申下し〳〵。諸州々の兵士を招き。武器の練磨
浅深を賞罰せんとする旨。女房を以く奏せく〳〵。上皇も押勝
が心を宥めんと思〳〵玉ひん。頓く許させのひくまく。押勝心中
ふ笑を含く。直ふ大外記高丘平麻呂ふ命く〳〵。御正印を取出
さ已。自く〳〵守護く〳〵退出す。精忠無二の清丸い日夜仮も無怠
御政事を窺ひ奉るく〳〵ふ。今百兵士修練を託く〳〵。官印を
申出せく〳〵を聞き。兼く交を百ふする大外記なくまく。今夜ひそうま

自宅ふ招き。官の始末を聞く後。何くう奇密を託せく〳〵。此良
麻呂い承諾く〳〵猶ほく密話數刻に及ぶ。押勝い念なふ官印を
取出。まづ近國の武臣を招く。隠謀を語る聞すふ。一旦ふ
権を恐れ。荷擔の誓紙なく〳〵。あく〳〵。又人欲ふ迷ひ。後栄を計りて。
腹心とく〳〵。あく〳〵。惣計三千余騎の勢なくまく。押勝大ふ歓喜く。
出の出い不日事を発せんと。事く准備をなふ。大外記高丘の
平麻呂。清丸が亭ふ走来る。足下の教示く従ひく。佞諛を以て
押勝ふ荷擔せく〳〵ふ。甚始い永々。其終い不日ふ。已ふ軍を出さんとす。
速ふ隠謀奏聞ふ出ふべく〳〵。清麻呂きく〳〵左ふ出を有くん。是全
足下の忠節なり。早く奏上くまくべと。其功績を譽くる萬実
比良麻呂感嘆礼謝なく〳〵直ふ上皇ゞ皇居法華寺ふ注進す。

上皇大小驚きまどひいとぎ少納言山村王とゆして。汝中宮院と駈
く。鈴印と守護く敢べし命令とうけ。従僕多かべ異らし
かくべしと。西三個と卒く密ふ中宮寺ふいくう。鈴印を取敢る
所ふ。誰ゝ斯と通じん。押勝ゝまを冥て。上皇の御計むつぶ。
若くん隠謀を察しゝふ。此まあそい乗ぐくと。別舘ふある押勝
が二男。訓儒九ふ命じく奪ゝんとす。原より血気の壮者なまば父の命
をきくくも。狩衣の袖を沓ゝ結び。鞍味知る飛馬ふ乗ゝち。
従の士づけと云捨く。山村王が後を追ひ。なんゝく 先へ翔抜て
馬を前路ふ塞ぐ。いふ山村。汝が守護ゝ鈴印。父押勝ゝ奉
き。辞退せば身ふ害あくん。疾く急げ。苛立まば。山村王言を
正し。押勝公の御畏しとゝど。上皇の宣旨と受ゝまば。此夜次て

應かく。訓儒九気色とく。上皇ゝあまと帝ゝあまと。押勝が命
と背くぞきや。此上ハ問答無益と馬駈ゝ。山村が襟髪掴で
鞍輪ふ曳附従者とく印と奪ゝ。馬の頭を立直し。従者を
苛ゝ引返せ。山村王ハ元念なく。流石文事ハ暗く弱ど。武
備ハ左まで。ゝかぶ這々の体ゝ走ゝ敢て。有し始末を奏ゝ。
命と辱く罪を乞ふ。上皇大ふ逆鱗まく。武勇ふ名を得し
坂上朝日苅田麻呂。田村丸の父く雄鹿宿祢嶌足の両将と召ま。官軍
百五十騎と授け。訓儒九を誅伐せむ。両将奉承り。急卒ふ
准備く。訓儒九が舘ふ向ふ。門外ゝ声々ふ。上皇叡慮
まく。鈴の印と召まふ。山村王ゝ狼籍なく。剰へ印と奪ゝ
国賊訓儒九御印と遮ゝ。縛を受ゝ。門内ゝ

乱入ば。敵も准倫や做ふ。家従数十人覚出弓矢を舁いて射出ず。官軍些し後退ふ。弓手の堀重門八字に開かせ。中央に恵美訓儒丸。きびやふ鎧一縮し。従軍を左右に似ぐ。官軍と吃ふ。国賊ふ舌長なり。天皇守護御ふ。紫微内相押勝ぐ預て奉ふを。今い法尼の身を以て。望ふ為ふ不審なり。早く立帰て此旨申せ。官軍の輩ふを聞き。惜き国賊の言条ふ。速ふ斬入ふ。哄と鳴て切掛ふ。敵軍も大き呑へ。入交々戦ふ虜ふ。官軍の大将苅田九へ。強弓の名誉。馬上ふ突ふ訓儒丸。汝天禄を厚ふ帝ふしらの干戈を振ふ。其天罰を思ひ知ふ。弓絃を引絞て兵ふ前あらず。訓儒丸ぐ徇板ふ揚巻ふ射貫ふ。

堪止も敢ず馬上ふ喧と。落ふ。死ふ。似軍多へ是ふ。弓勢ふ謄を遺ふ。人ふ我い後ふ。偽病ふ首襟ふ。右往左往ふ散乱す。逃ふを追ふ雄鹿島足馬駈ふ。館ふ踏み御仰やあふ。点検ふ。まぐ押勝ふ贈ふ。書院の上陵ふ安漠あまぐ。島足護ふ。守護し勝間三度挙ふ。勢を国々頻々皇居ふ立帰ふ。戦の次第を奏上し。鈴の印を奉ふ。上皇良く宸襟を休ふ。両将を享く。褒祢しふ。両将へ商議ふ最早隙漏露顕ふ。押勝皇居を襲ふ。防禦ふんべあるべふ。奏し奉ふ。則両将ふ紀の船守を加ふ。禁門を緊く守護しふ。

逆徒走湖家天誅

却説叛臣惠美押勝ハ苅田麻呂島足ガ云フ。爰ニ訓儒丸ヲ
討ヒ加之奪得サウ〜印ヲ取返サレ。大ニ怒リ苛ラ〳〵。自身ニ
皇居ヲ襲ンとす。折柄荷檐の将。近衛将監八田部老傷ヲ
て。密談〳〵て居〳〵ル。此体ヲ見ン〳〵押勝ヲ上ル。勝敗ハ軍ノ
終末の勝ヲ勝とす。いざ軽卒〳〵出馬あ〳〵ん哉。畢竟要害も
なき法華寺の皇居。何程の支あ〳〵ん哉。今某ニ五百の兵ヲ
ろんニ。忽皇居ニ参入し。道鏡ガ首ヲ抜。公ガ積日の罰ヲ開ん。
願ハ行〳〵ん。押勝顔色ヲ直し。足下ガ言の如ク。後日ハ
厚く賞ス〳〵と。仮軍五百騎を率ヒ。老ハ勇ニ男。公拉ヲ高く
一喝し。追冠吉相ヲ報ズ〳〵と。ヲ私宅ニ馳帰る。曹清美ニ
出ル。五百余騎を前後ニ押てゆく。都の人

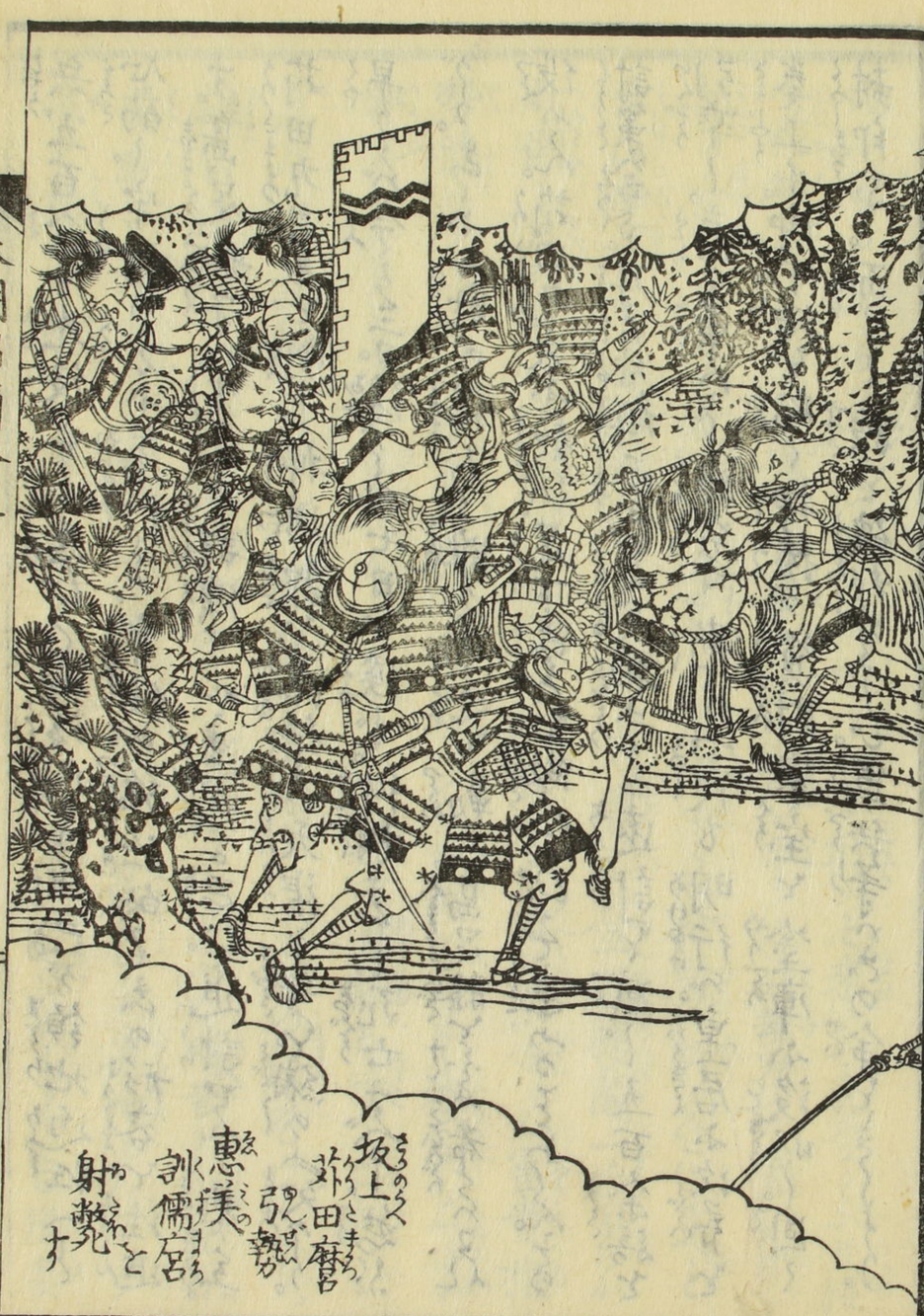
民大ニ周障。須我哉軍ガ発〳〵ス。老ヲ助け稚さを抱き資財ヲ
運ビ東西。淀陽ヲ騒乱す。皇居ヲ守護の苅田麻呂出張ス賢
良将なるニ。飯陣の時ニ腹心の士を。訓儒丸ガ敗兵ヲ支ヘ押勝ガ
鉞ニ入ル。是時苅田丸ガ陣ニ馳参ス。老ガ始末ヲ注進す。
苅田丸ハ島足飯守ヲ商議ス。老ガ軍兵恐ル〳〵ヲ有ル。
皇居ヲ〳〵又ヲ支ヘ入ル。恐ル〳〵ヲ。頼ハ途中ニ待ル
追拂フ。紀飯守ヲ出両将ニ勝軍ヲ奉ル。此軍ニ某
を向ケ。外田丸ヲ従ヘ進発
ス。八田部老ハ皇居ヲ襲ヒ。道鏡ヲ
捕取。勧賞ヲ蒙ル。捕ニ勝軍ハ両軍路上ニ行逢フ
老ハ先軍ヲ止め陣頭ニ進ル。其一軍ハ敵ヲ味方ヲ明ル

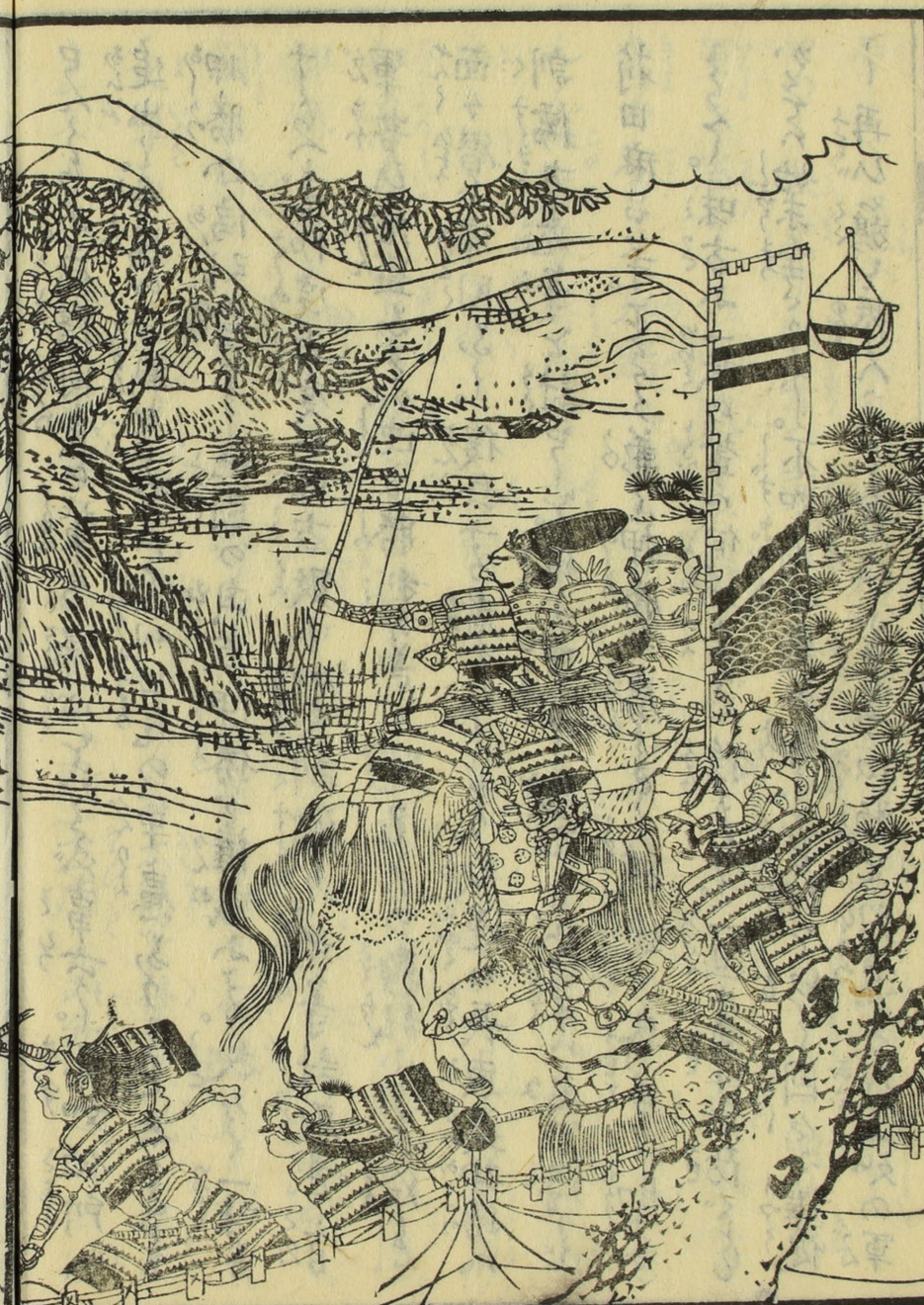
名告を聞ん。船守も前軍を左右ふ[illegible]色。中央ふ[illegible]。味方なる[illegible]ふ支可矣や。勅を奉ぜ[illegible]紀船守。逆賊ふ仮人八田部老と。徐罰の[illegible]向ふ[illegible]。汝が厚子る近衛の将監。近[illegible]衛の職を忘れ。上皇ふ讐する天罰の。既ふ狭[illegible]。早く此處[illegible]。一刀の下ふ罪を滅ぼん。と。高声ふ呼[illegible]。老い一言も返答[illegible]。士卒を下知[illegible]可懸[illegible]。苛[illegible]。船守も先陣を励[illegible]。戟先を斉[illegible]。討[illegible]。追つ返[illegible]。戦ふ[illegible]。船守が下知を受け[illegible]。裏町より[illegible]。八田部勢の横[illegible]。二百騎[illegible]。鬨声を上[illegible]。會釈もなく討入べ。思ひ掛ぬ八田部の仮軍。忽前後両端となる。[illegible]為ふ先手の軍兵些[illegible]。賢[illegible]。船守ハ[illegible]。歩振[illegible]。軍ハ[illegible]。笑入。勇[illegible]。踏込

踏込勢ひ猛ふ切崩す八田部の兵卒。[illegible]。将監老ハ大ふ怒り。大太刀を向ふ差かざ[illegible]。死[illegible]。狂ふ切て廻る。[illegible]。官軍も。流石ふ[illegible]。[illegible]。船守遥よ[illegible]。馬を陣頭ふ[illegible]。[illegible]。老血走ひ[illegible]。官軍の大将船守[illegible]。名もなき兵卒を苦[illegible]。此處ふ来つ[illegible]。某が。一刀の下ふ死を[illegible]。老ハ船守と[illegible]。倍怒心頭ふ発し。[illegible]を蹴立馬駆[illegible]。一喝声[illegible]。打太刀を丁と受て発的と[illegible]。苛[illegible]。討つと身[illegible]。互ふ若ず虚々実々。人交と[illegible]。[illegible]。邪ハ正ふ不勝る諺。天罰ハ[illegible]。苛[illegible]。討込太刀。請損じて真向[illegible]。咽喉ふ[illegible]。切下[illegible]。二言と発ぐ死[illegible]。八田部勢ハ[illegible]。大将[illegible]。為誰ふ軍と做人

原ふも道ふあるべき合戦ふ俊し。逆賊の汚名を受よ。散々
なる敗走す。船守い凱歌を挙げ。勇ましく皇居に帰る。猪
軍を奏すべ。叡感ふ斜なる。扨三将い猶も高綱に。去の
虜ふ乗じ押勝ぐ。鼓ふ押よ追討せば。一挙ゐて支を決せ
んと。此旨条奏聞な奉ふ。上皇の叡志よ肴合し。禁門を衛
府ふ譲る。三将ともふ発向ふべし。軍宣旨ふ刈田丸。葛足
船守奉ふ。官軍惣計一千五百騎。意気清々し隊伍を正。
押勝が鼓ふ押寄て。表左右の三方と囲む。魁し一方を明き。
鼓を斉声を挙ふる志ふ。今日も早日暮西ふ及べ。
夜軍ふ放火を憚て。陣門を固め大角を焚て。敵若打出
ふ度ふ。陣々厳重ふ守禦ふ。斯一方開ふ。此所ふて戦を決

ふ。荷擔同意の輩ふ。帰心を抱ぶ事ふ。不如他所へ
追出し。平場の合戦ふ。刈田丸の軍慮ふ。
押勝ふ偽引登ふ。他国の武者。押猪が権威ふ。扨ふ一味ふ
すべ。初度再度ふ味方敗し。加之訓儒丸老等討取ふ。官
軍勢ひ隆盛ふ。迚も勝利ふ。暁ふ。去の騒乱ふ。
面々潜ふ帰国ふ。後兵する者ふ。逆の長恵美押猪い。
訓儒丸老等を討ふ。殊ふ無念ふ思ふ。寄手い名を得
苅田麻呂等。ふ兼ふ押勝ふ虐ふ。族追ふ寄手ふ助
ふ。味方ふ一味の輩い。何地去ふ。猪ふ。一旦寄手ふ防ぐ
かふ始末ふ。不如先此處ふ去ふ。官印ふ以ふ国々ふ催促
し再び旗ふ挙ふ。倉卒ふ妻子従類ふ引連ふ。従ふの軍


坂上
苅田麿呂
弓勢
惠美
訓儒麿
射藝



兵五百余を先後ろ〳〵。恐びく〳〵ふ後門より出。己が領地近江へ〳〵心的し。宇治の方ふ落行く〳〵。斤候の旗紅敏ふ。其の形容と注進す。島足水守ハ安ろも。討洩せを遺念る思ひ。追討ひん〳〵勢を荊田丸ものを制し。押勝都を落行しふ天渠ゞ寿と。縮の父なり。早〳〵ゞ今ろ三日。後〳〵ゞ七日を俟ぐ。似類まで死亡すゞ〳〵。然ふぐ〳〵。もふ一計の謀あり。誰〳〵之を勅ん。島足勝を希ふ役めん。荊田丸大ふ歓び。足下ものを做んまいで患ものを計策ふ。耳ふ分解示ふ。島足拍手〳〵遠討を感じ五百人余を引卒し。直ち勇んで進発す。斯〳〵此夜も明行べ。皇居ふ次第を奏上し。御下知を以く押搦ゞ。資財家宝を金庫ふ没収し。固く封印ふ。而〳〵鼓を破却なし。軍兵等いとの命をきく〳〵。

大ふ勇ち踊ち。兼日の恨ふと晴すこと。時ふと来られとるまふ大槍小槌棒手切木。手ふ應ふを幸ふ。曳々声と出〳〵破却なし。都の人民。まもく走来る。年来の恐恨。ふを絵へ許せ給へと希ひ助力なすとの數千人。美〳〵〳〵驚ふ。金殿楼閣一瞬ふ打倒し。只門扉のみを残る。嗟呼。昨日まで君竜ふ侍ふ富貴権勢隨意なるも。今日ハ勅勘の身ふうて善美と尽せ〳〵楼閣も一時ふ郊野となるとの。表裏及震定めもふ世の動静を恐ふ。斯〳〵皇居ふハ諸卿僉議し。押勝都を追纏ふとも。其の侵ふ〳〵上ぐ〳〵。誰ふ追補の時〳〵と。才智の人を撰ぶ。是ふ時昔ふ和気の清麻呂。姉廣虫ふ密ふ〳〵。今押搦の竜廃ま。道鏡ふ〳〵威を揮ふ。恐ふ珎支発〳〵ん。早く筑紫ふ退けらま〳〵。吉備真

備を召返しまうんこうに必用べき支おうん。廣虫も左なると。上皇こと夫
とふく。吉備の皈洛を勸め奉るに原より押猪ならもうんば則凡
吾皈るひ。今皈の元帥ぞ。吉備さうべいの奮ぞうう。真備と
惣大将に命じ。山城守日下部小麻呂。衛門少尉佐伯伊多智を副
将とす。官軍都合二千余騎を以て。進発と命ずい更く勅〳〵
宣く。太政大臣正一位藤原恵美押勝。太政官印と盗取て已に
逃去。忝も人臣とて。飽まで厚竜を恵なぶう。竜極て禍を発す。
直に位官を削る。諸の勇士急に剪除。天気を安じ奉き。重く
賞すべし。太山陰道北陸道ぞ〳〵太政官の印と。承用すべうず
命ぜさをうに。吉備已下謹ぐ勅を奉じ。凡て発の準備ふす。小宮
伊多智の両将ハ殊に押猪に嗜き。年頃遺恨を時〳〵。北

追討使と蒙うう。須破哉爵憤とうう子ハ此とき。夢平誅ぞく
置ぐさと。勇進打立う。恵美の押猪ハ妻子とうう小宇治ようう
迴うく道と急げと。婦女子の乗輿小路果ぬす。漸次海さ〳〵。
栗津石山後うんう。勢多の橋まで辿ぬ。豈計〳〵んや勢多の
大橋。その半間断落〳〵。向の岸に逆茂木と打。勢凡五六百騎。
朝風に旌旗を翻〳〵。甲の星と光輝〳〵。凛々然と扣う。押猪う
心凝し。領国の武士等の後兵。左右の橋と断〳〵ハ不審と。斥候
を出〳〵く熟見すう。旗の定紋別人なるず。牡鹿宿祢鳴足ぞ。
刈田森呂の遠計ぞ。領国に足を踏さ也と。田原道より先ハ廻ぞ。
押猪が勢とうい止うなう。押勝が軍兵大に驚き。島足ハ殺の
討手正〳〵前夜囲ぞ居〳〵ふ。何時の間ぞ爰小到うや當ぞ雲小

乘ふ在ずんば。身ふ翅こそ生ずべしと。忙果て居らるる。押勝兵士と苛く。舟やあると索ふしるとど。先刺島足ずと索ふ。湖辺の舟と捜ぐ已う陣後ふ集おけば。獵船一行も残らず。押勝いとく心と集燥。民家と壊ち。筏ふ組ま下知まる薄ふ。島見ら陣中ふ。一国の旗手動とえ。一舟ふ潮と鯨音と挙げ。繋止る大船小舟軍兵次第ふ乗移る。此方と責来ん結搆。押勝いとを。迎ふ敵対叶ず。諸軍と下知身と翻て京城道ふ辺づひよ高島郡ふ独着く。前少領角足が鈍ふ無体ふ宿労を休む。此夜不思議の夏社あき。押勝が卧る屋上ふ雷の震落が如き音。大さ尺余の怪星落る。彼卒大ず驚き。昔蜀孔明が営中ふ落星ろ。程なく孔明沒る。さあらばば

押勝ふ滅亡も表ずと唱合。密ふ落行も多ろ。押勝も。ふまを聞さ。愚なる者ども哉。昨夜怪星ふ味方吉相。天威と。ふ下すと。陣中ふ伴ひ。塩焼王舞大子道祖の命と。新天皇と尊祢。押勝が子息を仏三位。其余の輩も五位六位と授け。日月の旗と造。新帝の官軍。僭。西の高山今の叡山の麓を小楯ふ。陣営と連ね。官軍と俟つ。吉備真備ハ諸将ふ。都と進発。逢坂山ふ屯。敵の動静と伺ふ。高島郡ふ陣甘と安る。隨将物部廣成ふ謀計と。先達。忠立。小六呂と陸手の大将。伊多智と兵船の主将。湖上と陸二隊。向ふ。両将ハ我劣ら。彼卒水手と。高島ふ着ず否。小六呂の五百騎の彼士。嗟と喚く討て。

押勝も鬨を挙げ。向ひ合せて戰ふまゝ勝負も決せず。後の山岳より一隊の軍兵金鼓を打てあらゝ出内敕と奉り和気の清麿逆族が罰を問て。物部廣成と馳せ合ひて。押勝勢が後陣ふ計てから。思ひあらるゝ押搦勢ぞと崩て本陣ふ流星かゝる。先陣も之ゞめ。浮足ふなりて見へ引退く。小戸呂士卒を励し。縱横無碍ふ斬らる。後軍ふ清麿廣成大山の崩るゝ如く。刃火下ふ切立る。押搦が軍勢惣崩となり。濱手ゝ方ふ遁下ふ。俟没る佐伯伊多智。逆賊恵美の押勝。天誅すべふ此處ゝ迫る。速く頭を伸べ陣前ふ出て。自身大長刀水車ゝ廻し。真先ゝ進で難ゝ立る。主人ふ後ゝ成軍士。尖刃とそろへ斬くかゝる。押搦勢ゝ驚天し。誰ゝ一人向ふものなく。討ゝ者負ゝ走ず。押勝父子等逃ゝふ道なく。死を一斉ふ定めふ。いまゞを期ゝあるすゝ有ゝ佐伯が似軍ゝの乗捨て。舟ゝ有ゝ大ゝ船一艘湖辺ふ漂ふ。天の助と押搦父子。堀焼王と傳ゝ。従類及び兵卒等飛乗々々水主を呵しく。浅井郡堀津へ漕ぎ出ふ。遂ゝ悪風吹発く。大浪逆巻。原の高嶋郡三尾嵩ふ吹戻ゝ。押勝ハ詮方なく。陸ふ登りく。敗兵を集ふ。爰彼処ゝ出来ゝ。五百計の兵卒ふ。少し心を安じ。隊を立ゝ。日下部佐伯の両将。物部ゝ勢を一隊ゝて。喊を作つく四方を包ゝ。短兵急ゝ攻ゝ原ゝ一堪もなゝ物ゝ。流石一死族ゝ戦ふ。官軍ふ人ゝ怒ゝ。気速の伊多智馬駈出し。例の薙刀ゝ揮ゝ。眼前ふ逆賊を置なく。何の為ゝ猶豫する。歌と破ゝ斬するぞと。押搦が勢と難ゝ。廣成小戸呂も諸共ゝ。真先ふ切くかゝ歌兵ゝ

ふ討死し繞ふ十騎ばかりふ討たるる。押勝父子遁れ去て。以前の舟に乗うつり何国と的とする方もなく。浪よまに任せて陸をたどる。官軍いきほひとうて。數百艘の早船を以て追りけ。終に四方に追取巻。矢先をそろへ散々ふ射る。官軍の中より石村石麻呂の小舟とよせて敵船に飛のり。押勝ふ無手と組。押勝も死力を出し。互ふ少頃操合しが。天誅既ふ迫至る。終ふ石麻ふ級首を討る。押勝が男父討るると見て。兄弟互に指ちがへ。湖中ふ入亡ぬ。官軍ハ陸ふ残る塩焼王ならび押勝が妻子従類三十余人を生捕て。諸軍と集め。凱奏三度一斉に挙て。徐々都ふ引取ぬ。勇々しかりける

李朝錦繡段図會巻二畢